

3・11後を生きる

退避…捜せなかった命

浪江町一部で立ち入り可能に

福島県浪江町の一部で一日、日中の立ち入りができるようになった。早速、河口貞史カメラマンと一緒に入った。

東京電力福島第一原発のすぐ北にある浪江町は悲劇の町だ。人口は約二万人で、東日本大震災の死者行方不明者は百八十四人。町の復興計画には「原発事故により行方不明者の捜索ができないまま避難

井上能行の
ふくしま
便り



東京新聞福島特別支局
電話 024(535)2327
FAX 024(535)2328



津波被害の大きかった請戸海岸に設けられた祭壇。遠くには福島第一原発の排気筒が見える＝5日、福島県浪江町で

を余儀なくされ…」と記されている。生き残りながら、救助の手が届かなかった人もいたという。詩人・二階堂晃子さんは「生きている声」にそ

の様子を詠んだ。

被害が大きかった請戸地区。津波で流された小型漁船が何隻も残ったまま。田んぼに突き刺さった乗用車もある。窓ガラスに赤いペンキで「X」。安否確認が終わった印だ。「震災直後、三陸海岸で見たのと同じだ」。河口君がつぶやく。

請戸小学校に着くと、大きなモニメントの時計が三十分三十八分で止まっていた。卒業式の準備が終わった体育館の時計も、教室の時計も、同じ時刻を指していた。地震から五十分ほどして大津波に襲われたのだ。

校舎の一階はめちゃくちゃだった。二階にも海水が来た跡があった。ベランダに出ると、がれきが学校を取り囲んで、それにつながる人々の地獄

高台に上ると墓地があった。会津若松市の仮設から来た女性(仮)に話を聞いた。避難中に体調を崩して亡くなった親類の納骨だという。浪江町に戻りますかと尋ねると「原発は今もトラブルが続いているのよ。煙突(原発の排気筒)が見えるような場所にどうして住めるの」。(福島駐在編集委員)

「生きている声」

確かに聞こえた瓦礫の下から生きている声うめく声

(略)
救助隊は準備を整えたさあ出発するぞ！
そのとき出された町民全員避難命令

うめき声を耳に残し

目に焼き付いた瓦礫から伸びた指先

そのまま逃げねばならぬ救助員の地獄

助けを待ち焦がれ絶望の果て命のともしびを消していった人の地獄

請戸地区津波犠牲者一八〇人余の地獄

それにつながる人々の地獄

放射能噴出がもたらした捜索不可能の地獄

果てしなく祈り続けても届かぬ地獄

脳裏にこびりついた地獄絵巻

幾たび命芽生える春がめぐり来ようとも
末代まで消えぬ地獄

二階堂晃子詩集「悲しみの向こうに一故郷・双葉町を奪われて」(コールサック社)から。二階堂さんは1943年、福島県双葉町生まれ。福島県現代詩人会員。

一原発の排気筒。原発までは車で十分ぐらいで行けるとい

う。
地震発生時、同小には二年生以上の子ども約八十人がいた。先生たちは、小学生を迎えに来た保護者と一緒に走って避難した。
六年の担任だった加藤和美